

## バイオメカニクスを応用した鍼治療 —理論と実際—

森 山 朝 正

(筑波技術短期大学 鍼灸学科)

鍼灸の臨床に運動学を基礎にした理論を展開してきた。鍼灸の臨床に必要な全身状態の把握と治療部位の決定を、そして運動学の中での異常動作の出現の原因を、関節運動の異常な連鎖の中に求めた。ヒトの動きは単純な動作でも多くの関節と骨格筋の働きで成り立っている。効率のいい動作は、これに係わる関節運動の連鎖を観察する必要があるが、一方で、1つ1つの関節の動きについても効率的であるか否かを評価しなければならない。単一の関節運動の効率性は、骨格筋の機能を発揮するために必要な関節の固定に依存している。muscle setting とか動的固定と呼ばれている。この理論は G. Dyson の提唱した殻竿効果に基づいている。さらに、ここで重要な事は関節の動的固定に必要な骨格筋の機能と、関節を動かすために必要な機能の同時性である。それが基礎にあってダイナミックな動きが可能になる。具体的なダイナミックな動きについての評価は、二足歩行になった人間の動きを支える、①足部のわずかな異常やバランスの不均衡が、②下腿から大腿、③腰部そして肩関節、④頸部に様々な影響を及ぼすという理論を、様々な角度から検討し構築した。スポーツ動作のようにダイナミックな動きで誘発される方が確認しやすいが、日常的な動きの中で発生することも充分ふまえた考えである。

このような理論を鍼灸臨床に応用する簡便な方法として、鍼灸理論を運動学的な理論に取り入れた方法を検討した。つまり、身体の運動動作と鍼

灸治療の理論的体系である経絡を関連づけて説明することを試行錯誤してきた。結果、一部の経絡については骨格筋の機能と関節運動の連係により運動学的に理解することが可能であるという考えに至った。東洋医学にある診断と治療の原則の一つに、全身状態の把握と QOL の向上(未病治)があり、この原則的な考えに最も適しているのが経絡の概念と身体動作の連係であり、さらに全身の運動動作をこの理論に当てはめて行く方法として、福岡大学、向野等が提唱している、経絡の伸展負荷による異常感覚の誘発を促すテスト(経絡テスト)がある。このテストを用いて①運動動作の異常の再現性が確認出来るか、また②全身の動きの善し悪しを把握することが可能か、さらに③鍼治療の評価法としての有効性等について検討した。筑波技術短期大学附属診療所に来診した初診患者及び再診患者49名について検討した結果、①患者の訴え以外の異常な動作の確認が可能であり、②主観的な症状の変化とは別に客観的に運動動作の改善が確認できることなどが分かった。これらの事から日常的な全身の運動動作の異常を東洋医学的な理論に当てはめて評価する事の可能性が示唆された。すでにスポーツの世界では鍼がリコンディショニングの処置法の1つとして有用性が高い事は理解されているが、さらに経絡テストを導入して鍼治療を行う事により、日常的なコンディショニングとしても応用出来る可能性を示していると考えられる。